

資料紹介：邑南町輪之内墳丘墓

大野 芳典・真木 大空・今福 拓哉

はじめに

輪之内遺跡は島根県邑智郡邑南町（旧羽須美村）下口羽字輪之内に位置する。口羽公民館建設工事や県道浜田作木線改良工事に伴う既往の発掘調査により、主に弥生時代から古墳時代、平安時代の遺跡として注目されている（角矢編1998、吉川編2004）。口羽保育所建替工事に伴い、平成24年度にも発掘調査が実施されており、弥生時代の礫群や木棺墓および石棺墓のほか、古墳時代後期の竪穴建物が検出されている（第1図）。しかしながら、邑南町教育委員会で保管されている平成24年度調査当時の平面図や土層断面図を熟覧した結果、輪之内遺跡で検出した「礫群」を外表施設および墳丘周辺の配石遺構、木棺墓や石棺墓は墳丘を有する墓壇であると判断できた。そこで、これらを『墳丘墓』に関連する遺構として再評価し、基本的構造について紹介するとともに、周辺に所在する同時期の類似資料を踏まえた検討を行いたい。

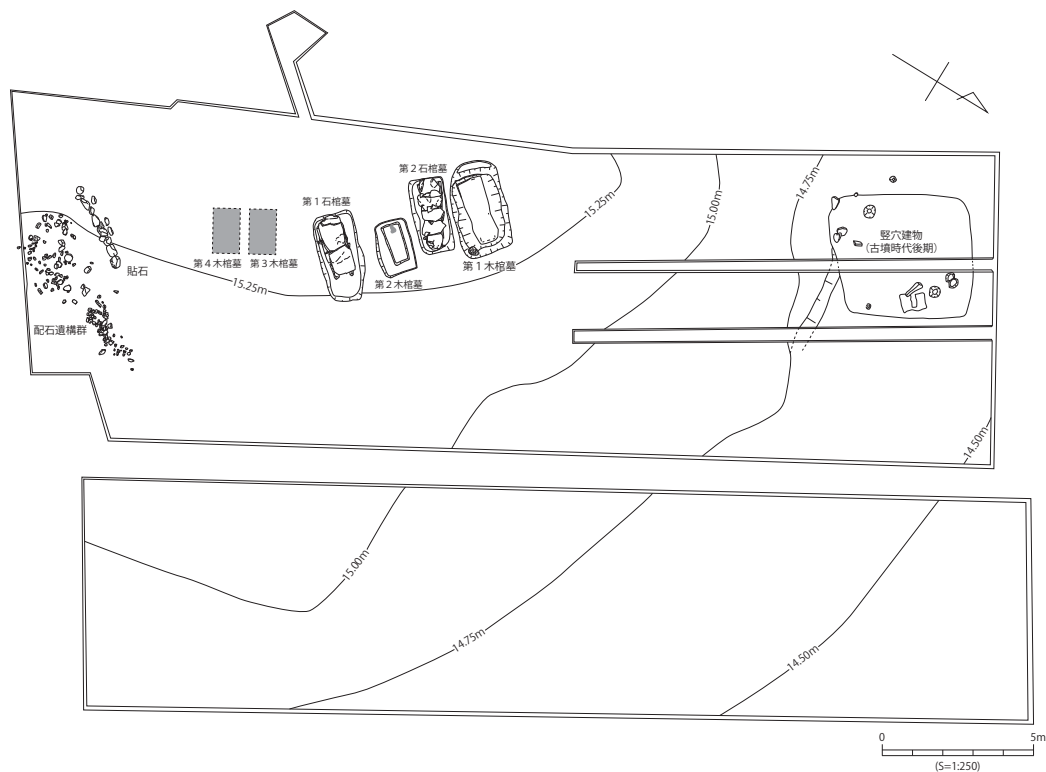
1. 輪之内遺跡を取り巻く地理・歴史的環境

（1）地理的環境

遺跡が所在する邑南町は、島根県のほぼ中央部の邑智郡南部に位置する。南西には中国山地脊梁が連なり、山地を境として広島県と接している。羽須美地域はその南東部を占める。主要河川としては、江の川に合流する出羽川があり、生活域は河川の流域に形成された盆地状の平地に展開する。その下流域西側が阿須那地区、江の川との合流地が口羽地区である。輪之内遺跡は口羽地区に立地する。

（2）歴史的環境

輪之内遺跡は町役場羽須美支所を中心とし、出羽川の左岸に形成された沖積平野全体に広がる比較的大規模な



第1図 輪之内遺跡平面図（H24年度調査）（S=1/250）

古代の集落を主とする遺跡であると考えられるが、その範囲は明確になっていない。平成24年度調査箇所は、遺跡の東端に当たると考えられる。以下、輪之内遺跡周辺遺跡の概要を記載し、歴史的環境に代えたい(第2図)。**輪之内遺跡周辺の遺跡** 羽須美地域内で旧石器時代の遺跡は未発見であり、縄文時代の遺跡もほとんど不明の状態にある。これまでに菅城遺跡で縦型石匙が出土しているほか、坪ノ内遺跡では晩期の土器片、輪之内遺跡(第2図1)では後期の土器片が出土している。

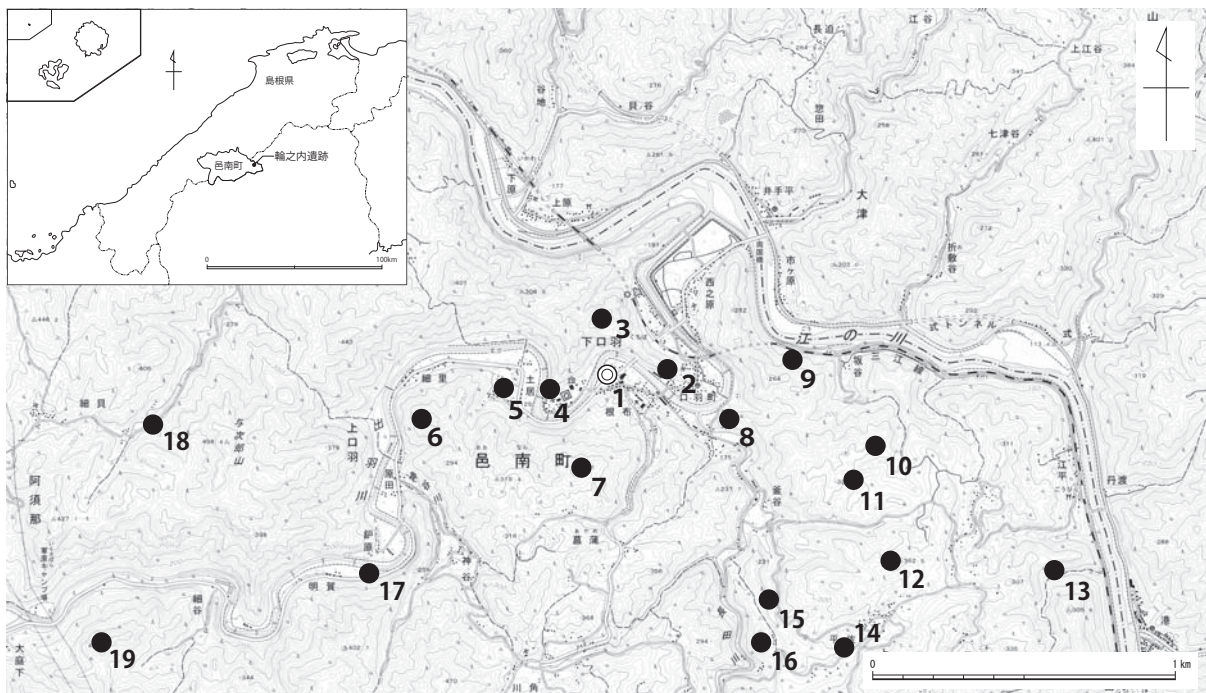
弥生時代に入ると出羽川やその支流の流域で遺跡が確認されている。阿須那地区菅城遺跡と口羽地区坪ノ内遺跡では後期の竪穴建物を検出しており、出羽川兩岸の段丘上などで集落が営まれたことを示すものである。

輪之内遺跡周辺の古墳時代の遺跡は、宮尾山古墳群(同図2)、中原古墳(同図4)が知られている。宮尾山古墳群では鋤、鎌、直刀、鎧の残片のほか、須恵器が出土したと伝えられている。現存する須恵器から古墳時代後期後半の古墳群であったと考えられる。中原古墳は口羽氏の菩提寺である宗林寺背後の尾根上に立地している。直径約10m、高さ約1.5mの円墳であったと伝えられているが、後世に西半分が削平されるなど、大きく改変されているため詳細は不明である。また、出羽川沿いの河岸段丘上に営まれた野伏原古墳は直径10m程度の円墳であると推測され、主体部は長さ7.1m以上、最大幅1.9m、高さ2.1mの横穴式石室である。この古墳からは山陰地方でも希少な三累環頭太刀が出土している。

古代の遺跡は、輪之内遺跡で須恵器の坏を転用した硯や9世紀後半の灰釉陶器、石帯の丸鞆が出土している。当時の出羽川流域は「^{くましろ}神稻郷」と呼ばれ、郷衛を補完する拠点的な集落であったことも考えられる。

中世以降の遺跡としては、山城や製鉄遺跡が複数確認されている。琵琶甲城跡(同図3)は口羽氏の居城である。口羽(志道)氏は、享禄3(1530)年高橋氏の滅亡とともに口羽に入封し、慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元に従い長州萩に移るまでの約70年間ここを拠点として活躍した。幡屋城跡(同図6)は琵琶甲城よりも古い時期の山城と考えられ、口羽氏以前にこの地域を支配していた高橋氏との関連も注目される。

邑智郡南部は近世から製鉄を盛んに行った地域であり、羽須美地域の上田・川角^{かいずみ}一帯は良質の砂鉄を産出したといわれ、この周辺に製鉄関連の遺跡が集中している。大半は近世以降のものであるが、中世に遡るものもある



- 1: 輪之内遺跡 2: 宮尾山古墳群 3: 琵琶甲(矢羽)城跡 4: 中原古墳 5: 土居松ヶ段古墓 6: 幡屋城跡 7: 高畑城跡
 8: 比丘人城跡 9: 坂谷鉦跡 10: 鉦ヶ迫1号鉦跡 11: 鉦ヶ迫2号鉦跡 12: 妙見城跡 13: 鉦屋敷鉦跡 14: 青山鉦跡
 15: 鉄クソ1号鉦跡 16: 鉄クソ2号鉦跡 17: 坂口鉦跡 18: 鍛冶屋敷鉦跡 19: 鷲影城跡

第2図 輪之内遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

と思われ、今後の調査によりさらにその数は増加していくと考えられる。

(大野)

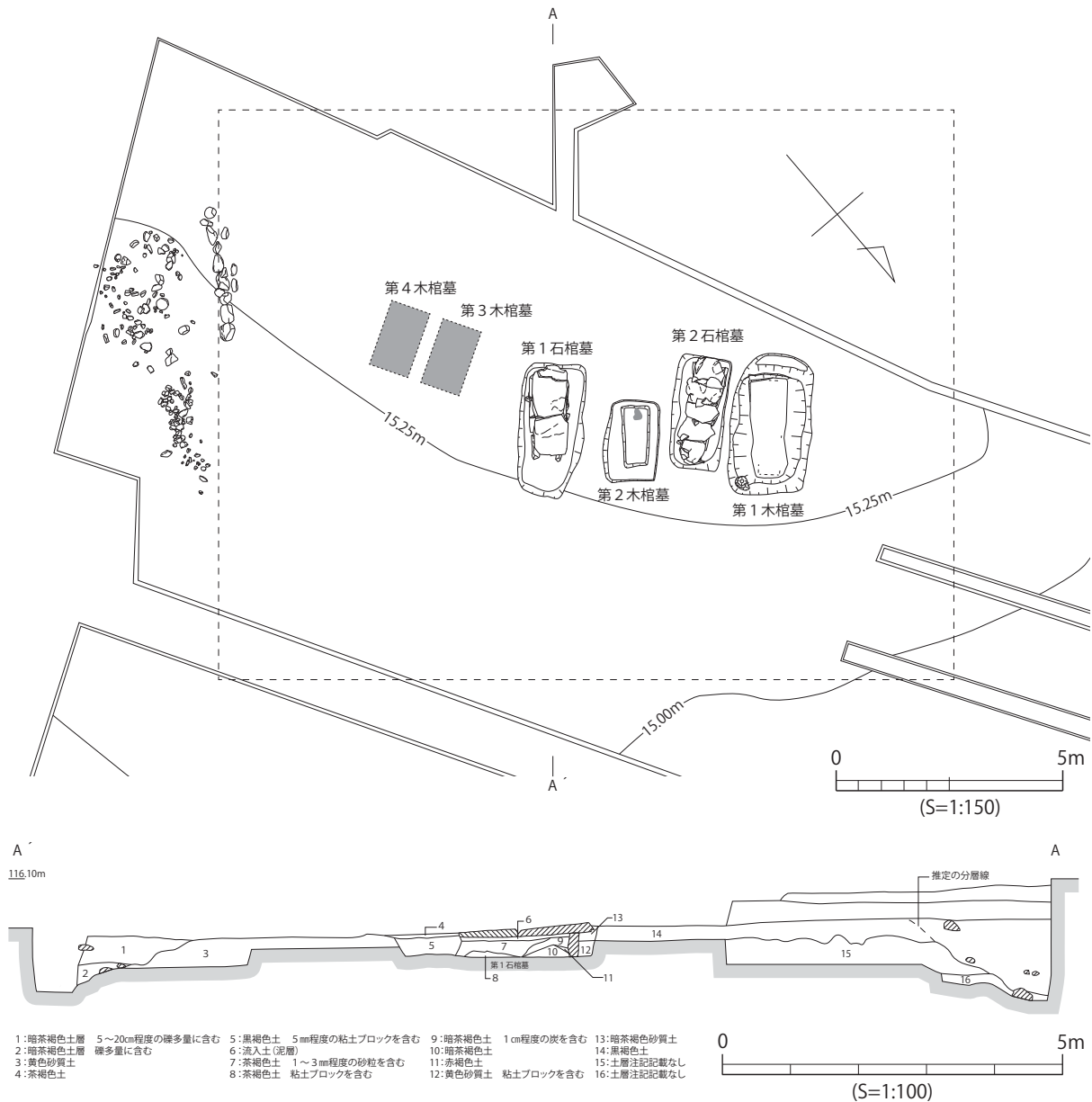
2. 墳丘規模と土層堆積状況

(1) 墳丘の規模および概要

資料熟覧の結果、輪之内墳丘墓は弥生時代後期中葉に築造された方形貼石墓であり、墳丘の復元長は約16.2m、復元幅は約12.5mとなることが想定できた(第3図)。墳丘上面は後世に削平されており、墳丘高は不明であるが、現状で0.7m以上となり、復元高は1.0m程度と推測できる。外表施設の残存状況は悪いものの、墳丘南東側で部分的に遺存しており、河原石を使用した1段の貼石が認められる。列石状の外表施設は伴っていない。なお、貼石は墳丘南隅に向かって若干ながら湾曲しているため、四隅突出型墳丘墓であった可能性もある。

墓壙は墳丘頂部平坦面中央付近に位置していると判断した。6基検出され、墳丘長軸に直交して並列に配置されている状況が指摘できる⁽¹⁾。なお、墓壙のうち2基は石棺墓であることが判明している。

墳丘、外表施設および墓壙のほか、墳丘墓の関連遺構として配石遺構(SX)を6基検出した。配石遺構は墳丘墓南東側で密集しており、圍繞あるいは集塊状の形態を呈しているが、土坑などの下部構造は確認されていない。



第3図 輪之内墳丘墓平面図・土層図

(2) 土層堆積状況

土層堆積状況は、邑南町教育委員会に収蔵されている土層断面図の記載をもとに整理した⁽²⁾。

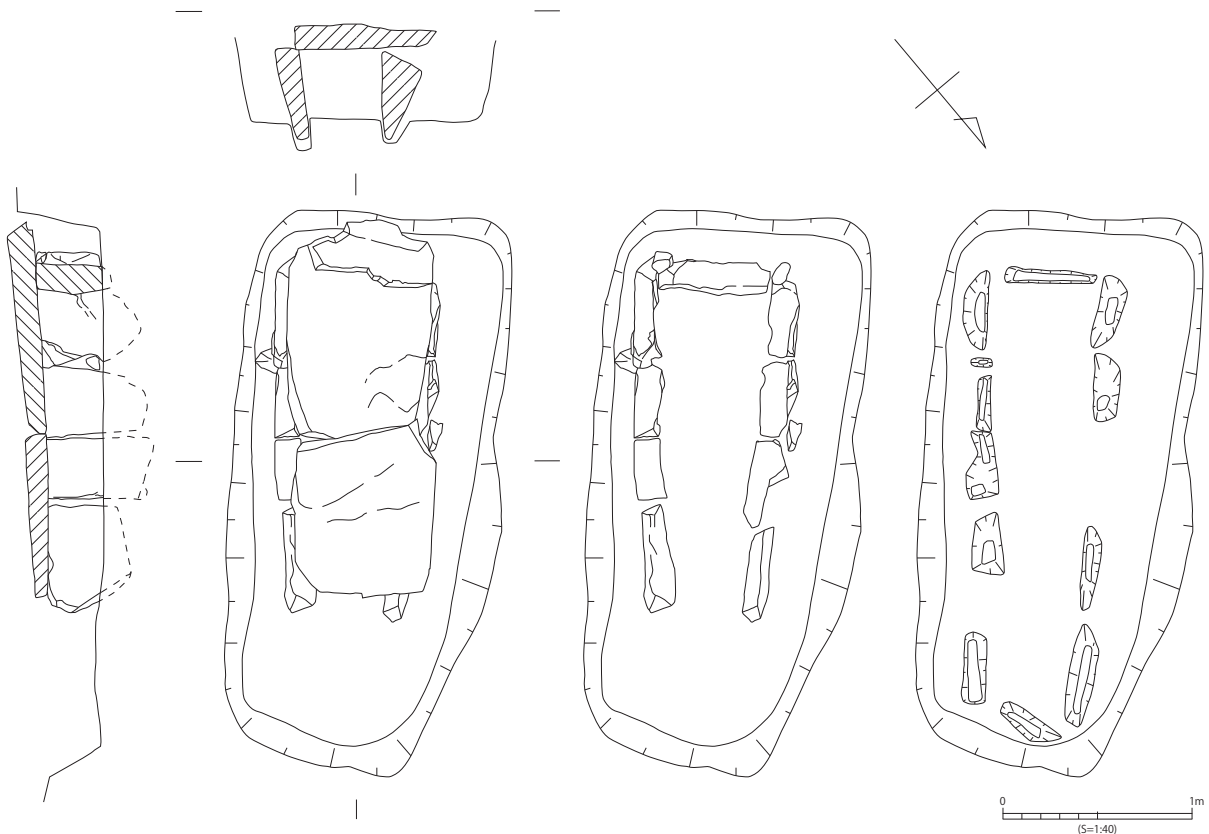
墳丘基盤および盛土 盛土として、第3図3・14~16層を確認した⁽³⁾。墳丘基盤層については不明であるものの、旧表土状の堆積が確認できないことから、地山削り出しによる墳丘構築面の形成を行っているものと判断できる。

盛土の堆積状況は、墳丘南側の土層堆積状況は不明瞭であるものの、北側では同図1・2層と3層の切り合いが確認でき、3層は墳丘頂部方向へ立ち上がることから盛土と判断した。同様に、15・16層も墳丘頂部に向かって立ち上がることから盛土として整理した。なお、16層は15層下層に堆積する土層であるため、墳丘基盤層の可能性も残る。また、これらの盛土層と外表施設を施している土層が同一のものかは不明である。



墓壇 墓壇は先述した盛土である第3図3層および同図14層上面で検出している。墳丘が後世に削平されていると想定できるため、本来の掘り込み面は不明である。ただし、墓壇検出時点で第1石棺墓では棺材が露出していることから、少なくとも現状より上方から掘り込まれたと推測できる。墓壇内部の土層堆積状況については、各遺構の記述で詳述するが、第1・2石棺墓は、石材の検出から石棺墓と判断した。第1・2木棺墓については、墓壇側面の掘り込みや底面の長方形の落ち込みを検出するとともに、棺痕跡（第6図4層および第7図2層）を確認している。また、これらの木棺痕跡より外方で裏込め土状の堆積を検出している（第6図3・6~9層）。以上のことから墓壇内に木棺が配置されていたと判断した。なお、第3・4木棺墓は調査時の記録が確認できなかったが、木棺墓として報告する（写真2）⁽⁴⁾。

写真1 墳丘頂部平坦面調査状況



第4図 第1石棺墓 (S=1/40)

3. 検出遺構

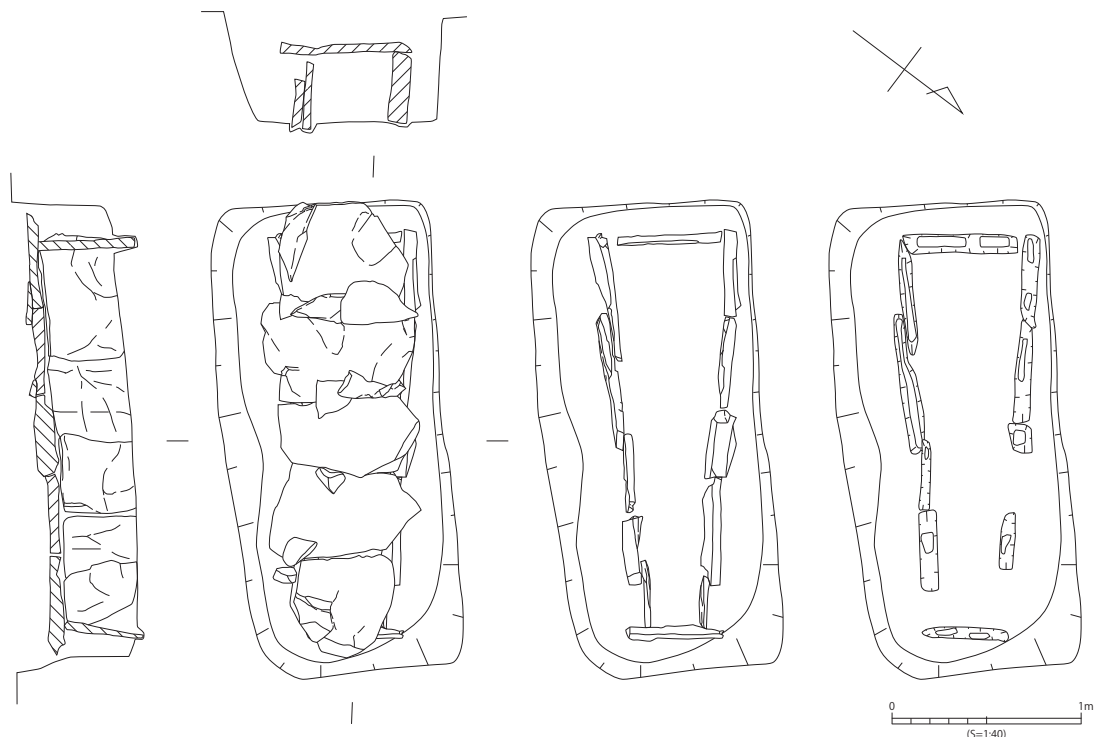
(1) 埋葬施設

墳丘墓に伴う埋葬施設を墳丘頂部平坦面中央付近で6基検出した（写真1）。そのうち2基は石棺が採用されている（第1石棺墓・第2石棺墓）。埋葬施設は墳丘長軸に直交して並列に配置されており、第1木棺墓の墓壇規模が最大となり、第2木棺墓は小型となる。また、詳細は不明であるが、第3・4木棺墓も小型である。

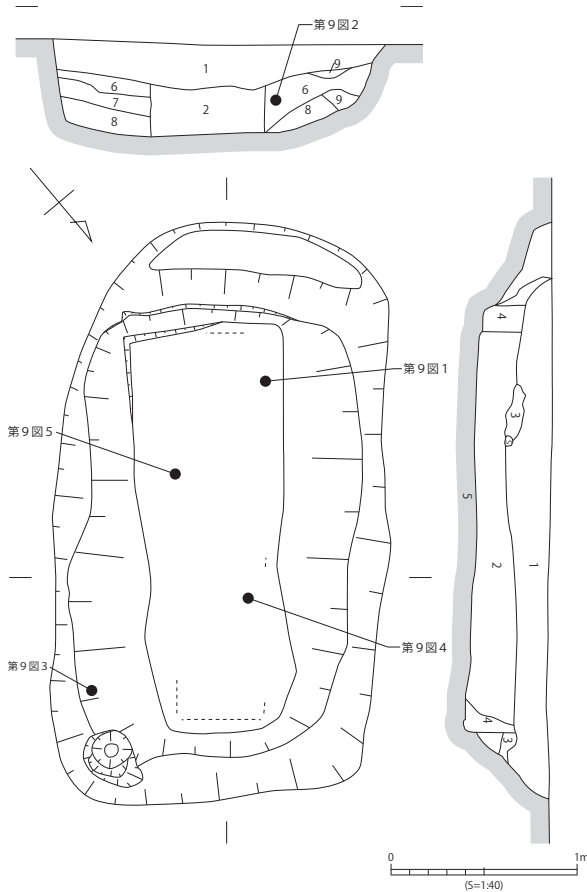
第1石棺墓（第4図） 第1石棺墓は推定復元した墳丘の中央付近で検出した。西側には第2木棺墓が位置する。墳丘が削平されているため不明であるが、墳丘頂部平坦面より掘り込まれたと推測される。墓壇上面の検出規模は、全長約2.96m、最大幅約1.46mとなり、やや不整形の隅丸長方形プランを呈する。墓壇底面の規模は、全長約2.72m、最大幅約1.28mとなり、深さは最大0.42mとなる。墓壇内部には板状の割石によってつくられた箱式石棺が配置されている。墓壇底面は板石を墓壇内部に設置する際に掘り込まれており、深さ約0.2mを測る。箱式石棺は墓壇底面の掘り込みおよび残存する板石より、内法で全長約2.1m、幅は南西部で約0.6m、北東部で約0.3mとなり、南西に頭をむけて遺骸を安置していたようである。副葬品は確認されていない。

第2石棺墓（第5図） 第2石棺墓は墳丘中央より西側で検出した。東側には第2木棺墓、西側には第1木棺墓が位置する。墓壇掘り込み面は他と同様に墳丘頂部平坦面と推測される。墓壇上面の検出規模は、全長約2.52m、最大幅約1.18mとなり、隅丸長方形プランを呈する。墓壇底面の規模は、全長約2.4m、最大幅約1.04mとなり、深さは最大0.58mとなる。第1石棺墓と同様に、墓壇内部には板状の割石によってつくられた箱式石棺が配置されている。墓壇底面は板石を墓壇内部に設置する際に掘り込まれており、深さ約0.12mを測る。箱式石棺は内法で全長約2.02m、幅は南西部で約0.6m、北東部で約0.26mとなり、南西に頭をむけて遺骸を安置していたようである。副葬品は確認されていないが、墓壇内からは土器片が出土している（第9図6・7）。

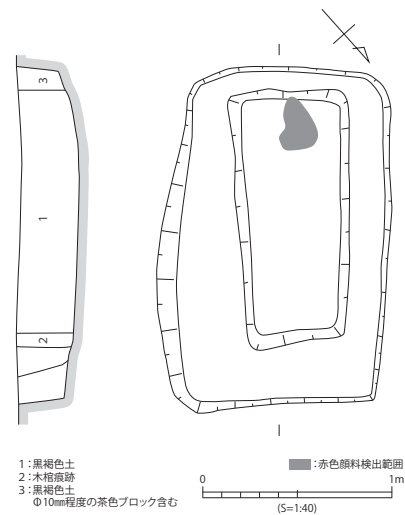
第1木棺墓（第6図） 第1木棺墓は墳丘中央より西側で検出した。西側には第2石棺墓が位置する。他の墓壇同様に、墳丘頂部平坦面より掘り込まれたと推測される。墓壇上面の検出規模は、全長約3.14m、最大幅約1.32mとなる。墓壇平面プランは南西部が二段掘り状で楕円形を呈し、北東部は隅丸長方形となる。墓壇底面の規模は、長軸約1.6m、短軸約0.75mとなり、深さは最大0.5mとなる。側板および小口板を固定するための溝は確認



第5図 第2石棺墓 (S=1/40)



第6図 第1木棺墓 (S=1/40)



第7図 第2木棺墓 (S=1/40)



写真2 第3・4木棺墓検出状況

できなかった。ただし、墓壇側面に墓壇底面とレベルが揃う掘り込みが認められ、棺痕跡(第6図4層)も検出されていることから、5層上面に木棺が設置されたと判断した。墓壇掘削後、木棺を配置し、裏込め土(同図3・6~9層)が施される状況を推測できる。なお、木棺蓋の痕跡は確認できなかったものの、棺上方に施された覆土(同図1層)が棺材腐朽に伴い棺内部へ流入したと考えられる堆積状況から、木蓋を伴っていたものと想定される。棺痕跡および先述した墓壇側面の掘り込み範囲より、木棺の規模は全長約2.3m、幅約0.6mとなる。棺の深さは不明である。棺材の厚みは木棺痕跡より、小口で約0.15mである。副葬品は確認されていないが、墓壇内部より土器片が出土している(第9図1~5)。

第2木棺墓(第7図) 第2木棺墓は墳丘中央付近で検出した。東側には第1石棺墓、西側には第2石棺墓が位置する。他の墓壇同様に墳丘頂部平坦面より掘り込まれたと想定される。墓壇は比較的小型で、上面の検出規模は、全長約1.8m、最大幅約1.22mとなる。平面プランは東辺が膨らむが、隅丸長方形プランを呈する。墓壇底面は北側が幅広となる長方形で、規模は全長約1.74m、最大幅約1.08mとなり、深さは約0.3mとなる。側板および小口板の固定のための溝は確認できなかった。ただし、墓壇底面中央付近が長形状にわずかに落ち込んでおり、この落ち込みの北東隅で棺痕跡(第7図2層)を確認していることから、埋葬施設として木棺を設置したものと判断した。第1木棺墓同様に、木棺蓋の痕跡は確認できなかった。棺痕跡および先述した墓壇底面中央の落ち込み範囲より、木棺の規模は全長約1.36m、幅は南西部で約0.64m、北東部で約0.54mとなる。棺材の厚みは木棺痕跡より小口で約8cmである。墓壇内から遺物は出土していないが、木棺範囲内の南西端付近で赤色顔料を検出している。赤色顔料検出地点および木棺の法量より、南西に頭をむけて遺骸を安置していたと推測できる。

(2) 外表施設

貼石(第8図) 墳丘南東側で貼石を検出した。部分的に遺存しているのみであり、詳細は不明瞭である。調査中の記録写真(写真3)より、川原石を使用し、墳丘頂部方向へ傾斜していることがわかる。このことから、墳丘盛土上面に施された貼石と判断した。貼石より東側には後述する配石遺構が存在するが、その地点に貼石に用



第8図 貼石および配石遺構 (S=1/40)

いられている川原石と同じ大きさの礫が含まれており、墳丘斜面より転落したものと判断できる。そのため、検出した貼石以外にも施されていたものと推測できる。なお、墳丘隅角部に向かって若干ながら湾曲しているため、四隅突出型墳丘墓であった可能性もある。

(3) その他の遺構

配石遺構 (第8図) 墳丘墓東側に10~30cm程度の礫を用いた配石遺構を複数検出している (SX01~06)。配石遺構は長方形の平面プランを呈するものが基本 (SX01・02・04・06) であるが、集塊状のプランも確認できる (SX03・05)。配石遺構は密集しており、SX01~03とSX04~06の2群に区分できる。また、各群の配石遺構は長辺あるいは短辺を共有している。規模は比較的大型のSX01で長軸約1.4m、短軸約1.0mであり、そのほかは長軸約0.6~0.8m、短軸約0.3~0.5mとなる。下部構造は伴っていない。また、これらの配石遺構に確実に伴う遺物は確認できていない。(今福)



写真3 貼石検出状況

4. 出土遺物

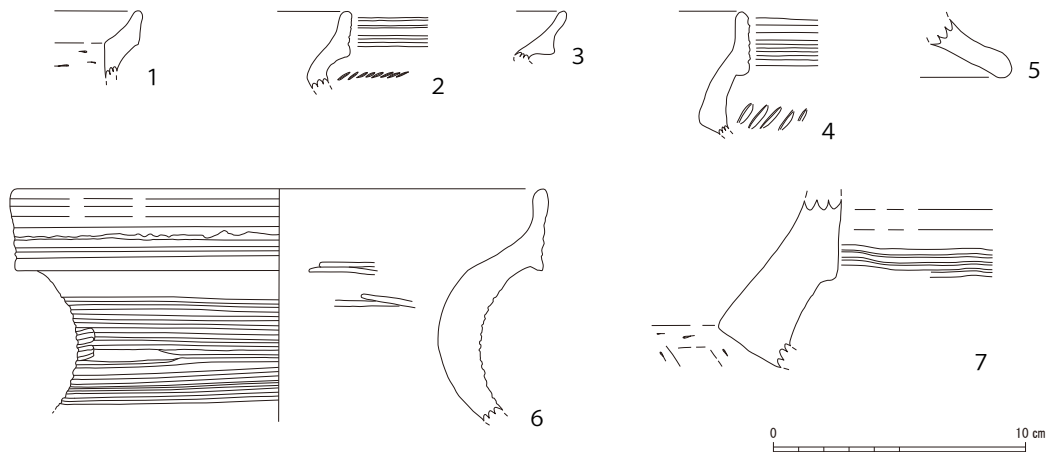
未報告となっているH24年度調査の出土遺物はコンテナ約30箱にのぼるが、このうち調査記録から墳丘墓に関わる可能性が高い遺物は約1箱に限られる。土器はいずれも小片であり、今回はその中で時期が判断できるものを中心に7点を図化した(第9図)。

第9図1は小型の甕もしくは鉢である。第1木棺墓の2層から出土した。口縁部の立ち上がりは小さく、外面はナデにより文様は確認できない。台付土器の脚端部の可能性もある。

同図2は甕である。第1木棺墓の2層から出土した。ほぼ直立する口縁部外面に4条の擬凹線文を施し、肩部にはへら状工具によるノ字形刺突文がみられる。

同図3は甕である。第1木棺墓の2層から出土した。口縁部の外面は強いナデにより大きく湾曲しており、文様は確認できない。

同図4は甕である。第1木棺墓の1層から出土した。ほぼ直立に立ち上がった口縁部の外面に5条の擬凹線文を施し、頸部には貝殻腹縁によるノ字形刺突文が巡る。



第9図 輪之内墳丘墓出土遺物 (S=1/3)

同図5は高坏の脚端部と思われる。第1木棺墓の1層から出土した。拡張はせず、端部を丸くおさめる。文様は確認できない。

同図6は壺である。第2石棺墓から出土した。接合できない同一部位の破片があり、もっとも遺存率の高い土器である。口縁部はほぼ直立して立ち上がり、外面は6条の擬凹線文を施した後で上3条分をナデ消している。また、未乾燥の状態で施文を行ったために文様が崩れている箇所も認められる。頸部には14条以上の擬凹線文が施されるが、2条で一単位の工具を使用したと考えられる。

同図7は壺である。第2石棺墓から出土した。口縁部から頸部にかけて非常に分厚い点の特徴で、頸部直下からケズリによって薄くなる。口縁部は先端が欠損しているものの、ほぼ直立して立ち上がっており、外面には擬凹線文が施され上部はナデ消されている。

これらの土器は同図6が石見V-3様式、その他は石見V-1~2様式と考えられ、中心は弥生時代後期中葉と考えられる。(真木)

5. 考 察

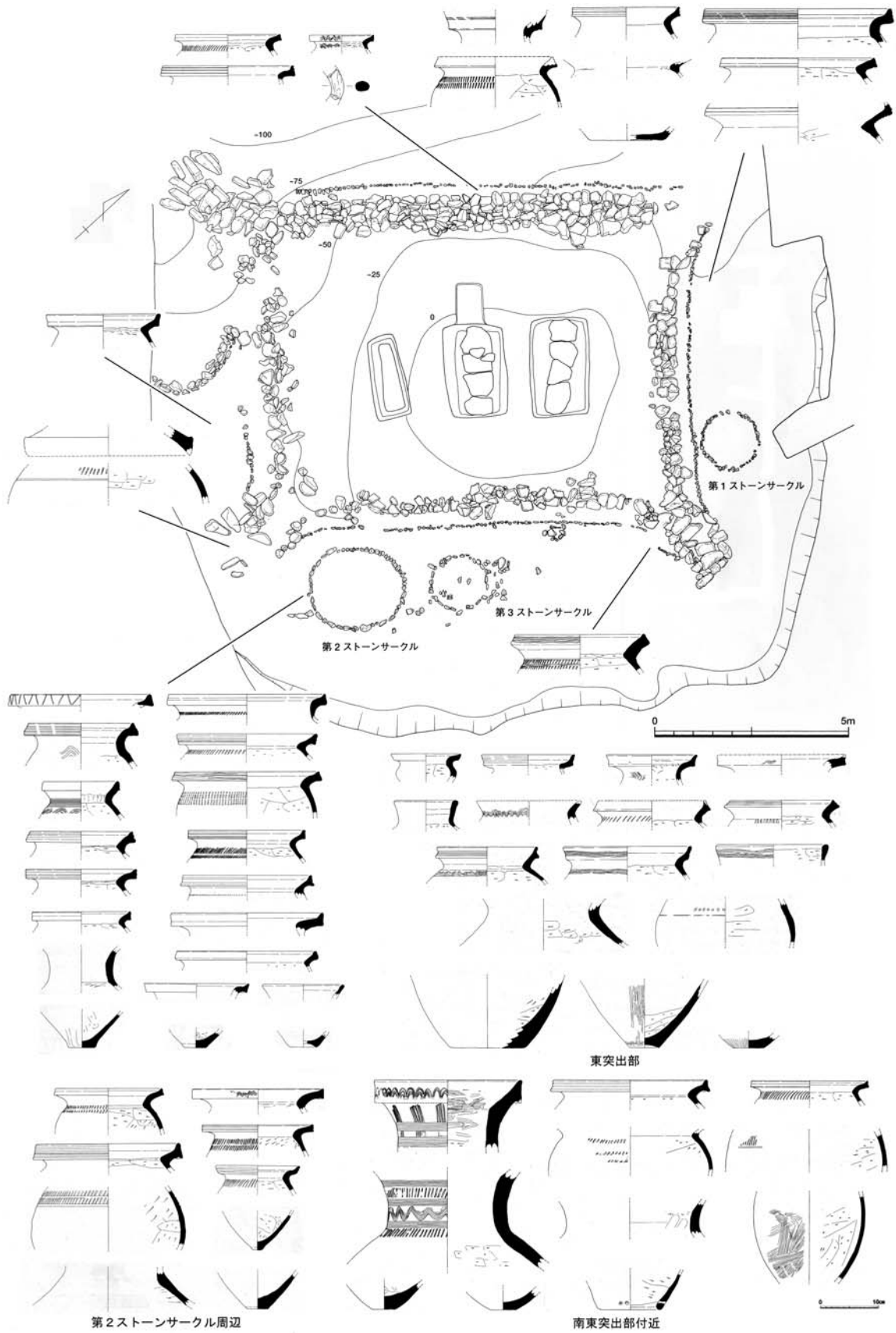
輪之内遺跡で検出された墓壙および配石遺構について、邑南町教育委員会所蔵の資料を再確認した結果、弥生時代後期中葉の墳丘墓であることが判明したため、本稿では輪之内墳丘墓として資料紹介を行った。本章では、確認した墳丘墓の諸要素について、整理と位置付けを行い、考察としたい。

(1) 周辺類似資料

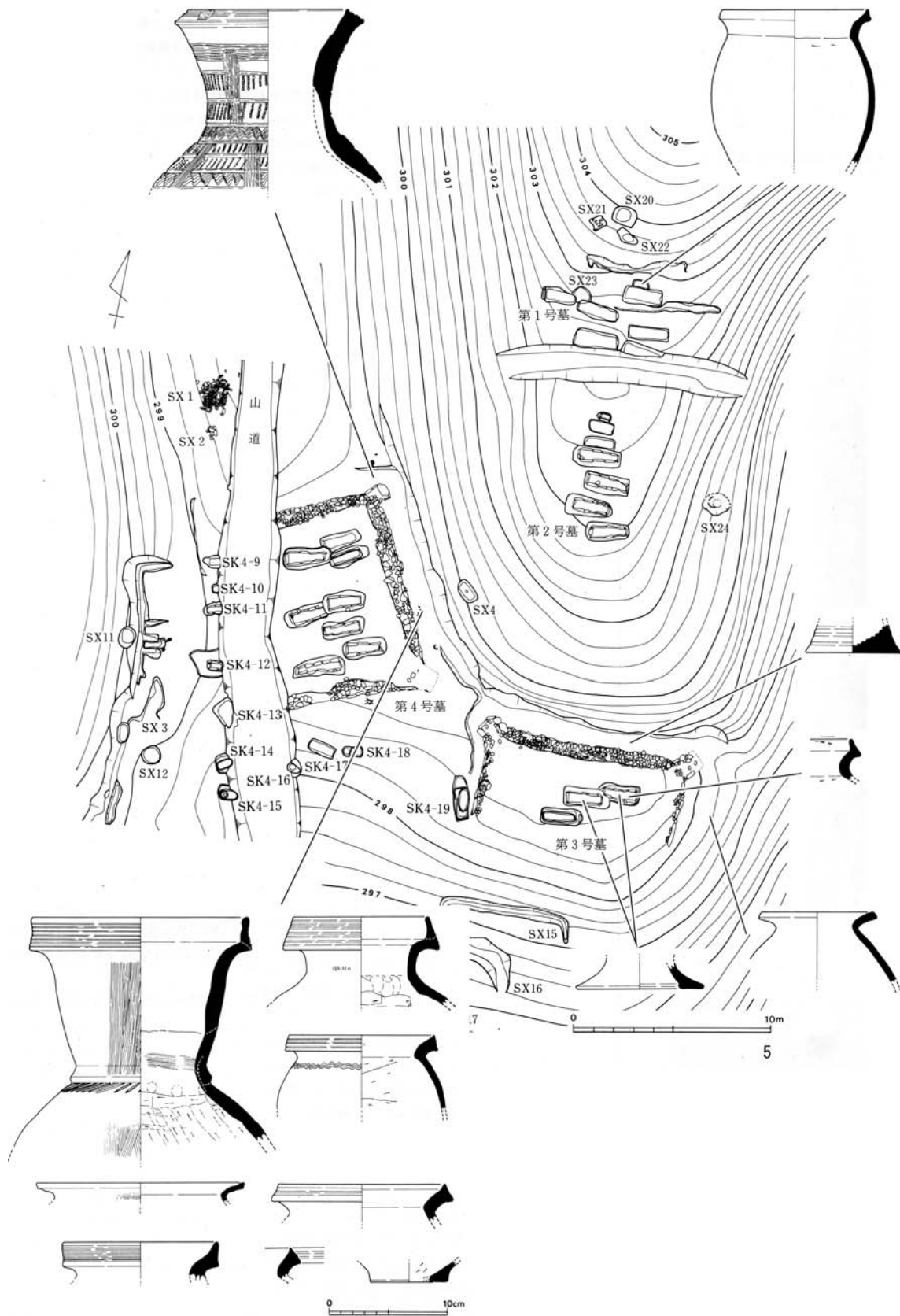
輪之内墳丘墓では、6基の埋葬施設を検出しており、そのうち2基が箱式石棺であった(第1・2石棺墓)。後期中葉の山陰地方で石棺を埋葬施設に採用する類似資料として、同町に所在する順庵原1号墓(第10図)が認められる。埋葬施設に木棺を採用することが基本となる山陰地方の中で、極地的な様相を示すものといえる。一方、山陽地方へ視座を広げると、埋葬施設に石棺を採用する地域が多く認められる。特に、安芸地域や備後北部地域に多く確認でき、広島県北広島町に所在する歳ノ神墳墓群(第11図)では、後期後半の墳丘墓群の埋葬施設に箱式石棺が採用されている。中国地方山間部において、埋葬施設に石棺を採用するという地域的なまとまりが想定できる。なお、輪之内墳丘墓では石棺のみでなく、木棺も埋葬施設に採用されており、埋葬施設の選択における山陰・山陽の地域境界の様相を示していることが指摘できる。

(2) 墳丘構造

墳丘構造については、以前今福が弥生時代中期後半から後期中葉の山陰地方の墳丘墓構造について整理を行っている(今福2021)。本稿についても、墳丘墓の諸要素である墓壙規模、埋葬施設数、埋葬配置、墓壙構築方法、



第10図 邑南町順庵原1号墓



第11図 広島県北広島町歳ノ神墳墓群

1. 墓壇規模

小型墓壇 中型墓壇 大型墓壇 超大型墓壇

2. 埋葬施設数

単独埋葬 少数埋葬 多数埋葬
2～3基 4基以上

4. 墓壇構築方法

墳丘後行型



- ・地山層及び基盤層から墓壇を掘り込む
- ・埋葬後に盛土が施される

同時進行型



- ・地山層及び基盤層に一部盛土を施した後に墓壇を掘り込む
- ・複数埋葬の場合、墓壇掘り込み面のレベルが異なる
- ・地山層及び基盤層に墓壇を掘り込んで覆土を施した後にさらに墓壇を掘り込む場合は同時進行型となる

墳丘先行型



- ・盛土施工が完了した後に墳丘上面から墓壇を掘り込む
- ・複数埋葬の場合、墓壇掘り込み面は同レベルとなる
- ・埋葬完了後に墳丘全体への覆土を施す事例が多い

5. 墳丘墓上の小型墓壇

- a類：小型墓壇が存在するが中心埋葬との関係性は不明瞭
- b類：小型墓壇が存在し、中心埋葬と切り合いをもつ
- c類：小型墓壇が単独で存在する
- d類：小型墓壇が存在しない

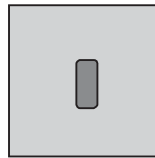
6. 墳丘規模

超小型 小型 中型 大型 超大型
(長辺) 2.5m 2.5～5.0m 5.0～15m 15～25m 25m～

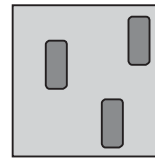
7. 埋葬主軸

長方形墳丘：長軸直交 長軸平行 斜交 正方形墳丘：斜交 その他

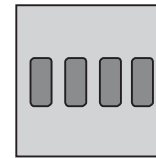
3. 埋葬配置



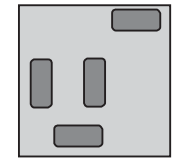
単独埋葬型
・区画中央付近に単独で埋葬施設が配置される



散在型
・配置に規則性なし
・縦列的な埋葬主軸が多い



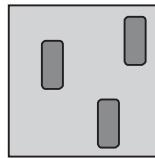
並列型
・埋葬施設が並列に配置



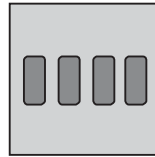
囲繞型
・区画中央を囲繞して埋葬施設が配置される
・区画中央に中心埋葬が存在する例が大半となる

埋葬配置Ⅰ類

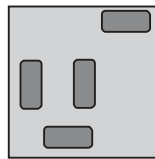
- ・中心埋葬が存在しない
- ・中心埋葬が存在しても、墓壇規模が大型化しない



散在型Ⅰ類



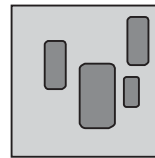
並列型Ⅰ類



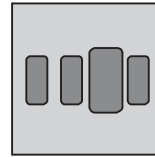
囲繞型Ⅰ類

埋葬配置Ⅱ類

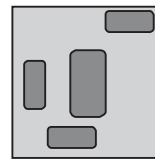
- ・中心埋葬が存在し、大型化が認められる。
- ・中心埋葬と周辺埋葬の切り合いはない



散在型Ⅱ類



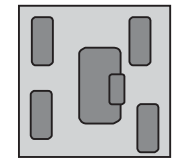
並列型Ⅱ類



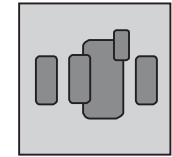
囲繞型Ⅱ類

埋葬配置Ⅲ類

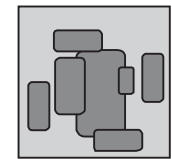
- ・中心埋葬が存在し、大型化が認められる。
- ・中心埋葬と周辺埋葬が切り合いは合う



散在型Ⅲ類



並列型Ⅲ類



囲繞型Ⅲ類

第12図 墳丘墓構造の分類方法

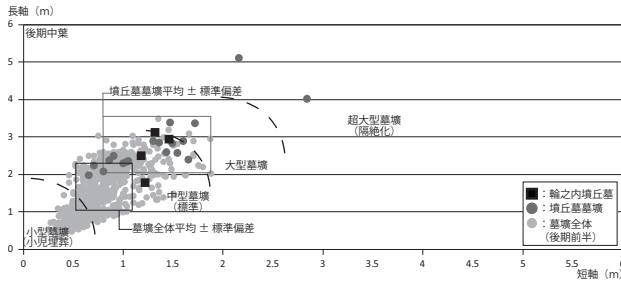
小型墓壇、墳丘規模、埋葬主軸について整理したい。なお、諸要素の分類については、第12図のような視点で実施した(第12図)⁽⁵⁾。

墓壇規模(第13図1) 墓壇規模については、詳細な規模が不明な第3・4木棺墓を除き、中型墓壇となる。後期後半の土壇墓などを含め、標準的な規模であることが指摘できる。また、第1木棺墓および第1石棺墓の墓壇規模はやや大型であるものの、墳丘墓上の墓壇規模としては普遍的な規模となる。なお、第2木棺墓は墳丘墓上の墓壇規模平均－標準偏差を下回っており、墳丘墓上の墓壇としては比較的小型のものが含まれる状況も把握できる。

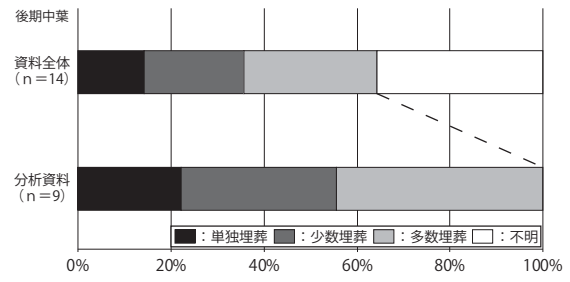
埋葬施設数(第13図2) 埋葬施設は6基確認しており、多数埋葬に位置付けできる。ただし、山陰地方における後期中葉の墳丘墓上の埋葬施設数については、輪之内墳丘墓と同様に複数埋葬が多いものの、単独埋葬、少数埋葬も存在する。そのため、埋葬施設数の指向は認められず、優位性などは不明である。

埋葬配置(第13図3・8) 輪之内墳丘墓では、6基の埋葬施設が墳丘長軸に直交して配置されており、並列型の埋葬配置であることが指摘できる。また、墓壇規模は先に示したように中型墓壇であり、中心埋葬が明瞭でないことからⅠ類となる。並列型Ⅰ類は、山陰地方の後期中葉で最も多く確認できる埋葬配置である。ただし、同時期に確認できる埋葬配置には、中心埋葬の明瞭化や規模の大型化、周辺埋葬と中心埋葬が切り合いを持つⅡ類やⅢ類も存在する。これらと比較し、Ⅰ類は中心埋葬が不明瞭、あるいは墓壇規模が大型化しないものである。

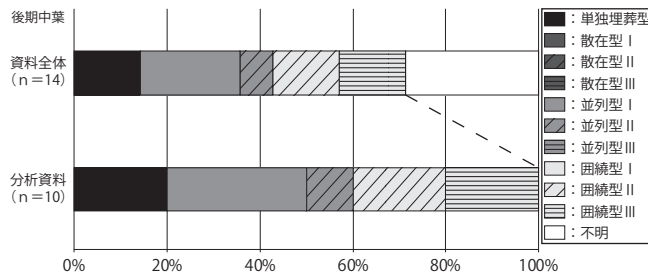
1. 墓壇規模



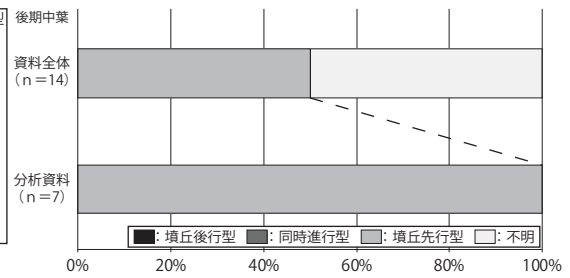
2. 埋葬施設数



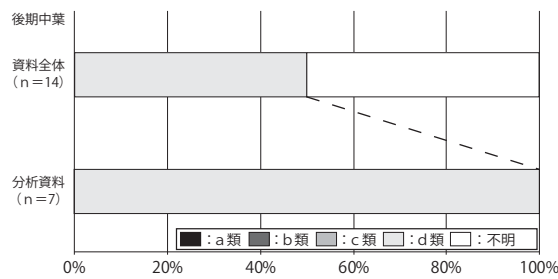
3. 埋葬配置



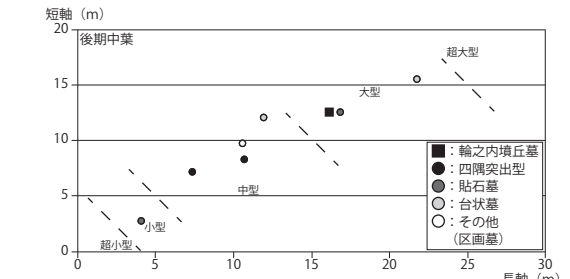
4. 墓壇構築方法



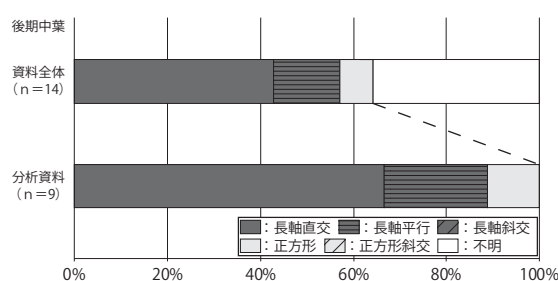
5. 墳丘墓上の小型墓壇



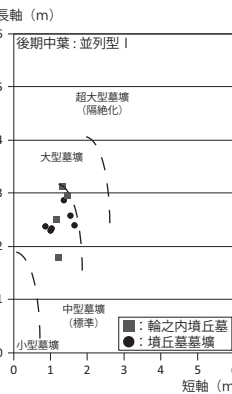
6. 墳丘規模



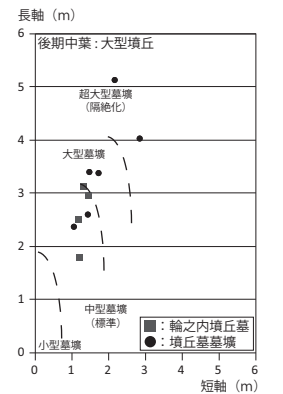
7. 埋葬主軸



8. 墓壇規模と埋葬配置



9. 墳丘規模と墓壇規模



第13図 墳丘墓構造の分析

そのため、両者に明瞭な差異が認められる。

墓壇構築方法 (第13図4) 輪之内墳丘墓は後世に削平されているため、本来の掘り込み面は不明である。ただし、盛土である第3図3層および同図14層上面で墓壇を検出しており、検出時点で第1石棺墓では棺材が露出していることから、少なくとも本来の掘り込み面は現状より上方であったと推測できる。そのため、墳丘築造がおおむね完了したのちに墓壇を掘り込んでいると想定でき、墳丘先行型の墓壇構築方法を採用していると考えられる。なお、山陰地方の同時期の墳丘墓は、基本的に墳丘先行型の墓壇構築方法により墓壇が掘り込まれている。輪之内墳丘墓においても、他の墳丘墓同様に普遍的な様相を示していると指摘できる。

墳丘墓上の小型墓壇 (第13図5) 先述したように、輪之内墳丘墓で検出した墓壇は、後期中葉の墳丘墓上の墓壇として、普遍的な規模である第1・2石棺墓および第1木棺墓のほか、比較的小型の第2木棺墓が確認されている。また、詳細な規模は不明であるものの、第3・4木棺墓についても、調査写真(写真2)から、比較的小

型となる状況が推測できる。ただし、確実に小児埋葬が想定できる小型墓壇の規模とはいえず、d類と判断した。なお、山陰地方の同時期の墳丘墓は、小型の墓壇を含まないd類を基本とし、小型墓壇が含まれる様相を示す資料は分析可能なものでは確認できていない⁽⁶⁾。

墳丘規模（第13図6・9） 墳丘規模は土層堆積状況（第3図）から推定しており、長軸約16.2m、短軸約12.5mと復元した。復元であるため詳細な検討はできないものの、大型墳丘に位置付けが可能である。ただし、大型墳丘に位置付けられる他の墳丘墓については、超大型墓壇や大型墓壇が確認されており、輪之内墳丘墓の墓壇規模の様相とは異なっている。分析資料が少ないため、詳細は不明であるが、墳丘規模の復元を誤っている可能性もある。

埋葬主軸（第13図7） 輪之内墳丘墓上の埋葬施設は墳丘長軸に直交して並列的に配置されていることが確認できる。同時期の埋葬主軸を確認すると、長軸直交あるいは長軸平行とするほか、正方形墳丘へ埋葬を行っている状況が確認できる。ただし、主体となる主軸は長軸に直交して埋葬施設を配置するものであり、輪之内墳丘墓においても他の資料同様に、普遍的な埋葬主軸を採用していることが指摘できる。

以上のように、輪之内墳丘墓の諸要素を整理した結果、墳丘規模については、大型墳丘の可能性が想定できるものの、その他は特異な様相を呈していないことを確認した。そのため、基本的には同時期の山陰地方の墳丘墓として普遍的な様相を示していることが指摘できる。（今福）

（3）出土土器

輪之内墳丘墓では土器の出土量が少なく、出土位置の明確なものも少ない。そのための検討できる事柄は限定的であるが、時期や土器の使用方法について若干の考察を行う。出土土器の時期は前述のように、弥生時代後期中葉を中心とし、後期後葉のものも若干認められる。装飾性の高いものはなく、甕の外面には煤が付着したものも多い。今回図示した土器はいずれも埋葬施設内の埋土から出土しており、墳丘周辺における土器の有無および状況は不明瞭である。

ではここで周辺の弥生時代後期の墳墓と比較を行う。輪之内墳丘墓と同じ邑南町内に所在する順庵原1号墓は列石・貼石・踏石状石列を伴う四隅突出型墳丘墓である（仁木編2007）。墳丘外には円形列石遺構（ストーンサークル）が確認されている。土器は墳頂平坦面や埋葬施設に伴うものではなく、突出部や墳丘斜面、ストーンサークルの周辺で多く出土している（第10図）。時期は後期前葉を中心としており、わずかであるが装飾性の高い壺も含まれている。ここでも外面に煤や炭化物を付着させた土器が多く出土している。輪之内墳丘墓と比較して出土量が圧倒的に多く、墳丘周辺での祭祀行為を想定できる。もう1つ、広島県北広島町の歳ノ神墳墓群では、弥生時代後期の墳墓5基が確認された（佐々木編1986）。このうち、3・4号墓は列石・貼石を伴う四隅突出型墳丘墓である。3号墓では埋葬施設や墳丘周辺から土器がわずかに出土したが、いずれも小片のため供献行為は明確でない。一方、4号墓では埋葬施設に伴う土器はなく、墳丘周辺から一定量の土器が出土した（第11図）。時期は後期前葉から中葉と考えられる。装飾性の高い壺も認められ、墳丘周辺での祭祀行為も想定できる。以上2つの遺跡は時期が比較的近く、石棺を埋葬施設に採用している点などで輪之内墳丘墓と共通している。土器の出土位置はいずれも埋葬施設や墳頂平坦面でなく、墳丘周辺に限られる。この地域では埋葬施設上に土器を供献する行為は定着しておらず、墳丘周辺で何らかの祭祀を伴った供献行為を一般的に行っていた可能性がある。輪之内墳丘墓では土器の供献行為について検討できる材料は少ない。埋葬施設内埋土から土器が出土している点については、小片が多く埋葬施設上への供献を積極的に肯定することはできない。また、順庵原1号墓や歳ノ神4号墓のようなまとまった土器の出土や装飾性の高い土器も確認できていないため、埋葬に伴う祭祀行為も現状では想定しにくい。副葬品の有無、外表施設の点で格差が認められることが、そこで行われた葬送儀礼にも関係している可能性もある。（真木）

おわりに

邑南町所在の輪之内墳丘墓について、その様相を紹介するとともに、山陰地方および中国地方山間部の資料との比較検討を実施した。弥生時代後期中葉の弥生墳丘墓は山陰地方での検出例は少なく、特に中国地方山間部山陰側での確認事例は同町で順庵原1号墓が確認されているのみである。一方、中国地方山間部山陽側では、中期後葉以降の豊富な墳丘墓資料により、発達過程の解明などが進んでいる。本稿で資料紹介をすることで、山陰・山陽の境界地の様相解明が進むことを期待したい。

註

- (1) 邑南町教育委員会に収蔵されている平面図では、墳丘中央付近で4基の墓壇（第1・2石棺墓および第1・2木棺墓）が検出されている状況を確認した。しかし、同教育委員会で収蔵されていた調査記録写真を確認したところ、これら4基の墓壇東側でさらに2基の墓壇が検出されていた状況も認められた。墳丘墓として復元した範囲内に位置していることから、これらの墓壇も墳丘墓に伴うものと判断した。
- (2) 邑南町教育委員会に収蔵されている土層断面図には注記がされていない土層も存在し、詳細な土層の解釈はできなかった。なお、一部の土層は整理段階で解釈の変更を行ったものの、基本的には調査当時の土層図をもとに整理を行っている。
- (3) 第3図14層は、邑南町教育委員会収蔵の土層断面図では、墳丘南西側に向かって堆積が続いている。ただし、第1石棺墓を挟んで堆積する同図3層の状況から、14層も盛土である可能性が高い。そのため、本報告では下層に堆積する同図15・16層の立ち上がりから連続するように推定の分層線を追記した。
- (4) 第3・4木棺墓については、平面図などの調査図面が残っておらず、正確には木棺墓であるか確認できていない。しかし、第1石棺墓検出時点で蓋石が露出していた状況を踏まえると、第3・4木棺墓に石材が伴っていたとは考えにくい。また、規模の類似する第2木棺墓についても、埋葬施設に木棺を採用していることが判明している。以上のことから、これら2基の墓壇についても埋葬施設に木棺が採用されていたと考えた。
- (5) 墳丘墓構造の分類についての詳述は紙幅の都合により省略した。分類の詳細については今福2021を参照していただきたい。
- (6) 小型墓壇を含む資料として、鳥取県鳥取市所在の門上谷1号墓が挙げられる。中心埋葬との切り合いも認められ、b類と判断できる。ただし、詳細な墓壇規模が不明であり、可能性として留め、分析対象として除外している。

参考文献

- 今福拓哉 2021「山陰弥生墳丘墓の発達過程について」『島根考古学会誌』第38集。
- 角矢永嗣編 1998『坪ノ内遺跡・輪ノ内遺跡』羽須美村埋蔵文化財調査報告書第2集、羽須美村教育委員会。
- 吉川 正編 2004『輪之内遺跡』羽須美村埋蔵文化財調査報告書第5集、羽須美村教育委員会。
- 佐々木直彦編 1986『歳ノ神遺跡群 中出勝負峠墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集、(勸)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 高倉洋彰 1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』20-2。
- 仁木 聡編 2007『順庵原1号墓の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書37、島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター。
- 藤田憲司 2010『山陰弥生墳丘墓の研究』日本出版ネットワーク。
- 湯村 功・平川 誠・下高瑞哉ほか 2017『新鳥取県史』鳥取県。
- 和田晴吾 1989「葬制の変遷」『古代史復元』第6巻、講談社。
- 和田晴吾 2003「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究－葬制の比較研究－』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 課題番号11410108。

分析対象文献(簡略表記)

- ①：島根県江津市1973『波来浜遺跡発掘調査報告書 第1・2次緊急調査概報』。
- ②：島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター2007『順庵原1号墓の研究』。
- ③：島根県教育委員会1999『三田谷I遺跡(Vol. 1)斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』V。
- ④：日下古墳群調査団1992『日下古墳群発掘調査報告書』。
- ⑤：大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告』。
- ⑥：倉吉市教育委員会1981『上米積遺跡群発掘調査報告Ⅱ－阿弥

大寺地区-。⑦：倉吉市教育委員会1992『柴栗古墳群発掘調査報告書』。⑧：鳥取市文化財団2017『重山墳墓群』。⑨：財団法人鳥取市教育福祉振興会1999『滝山猿懸平墳墓群』。⑩：鳥取県2017『新鳥取県史』。⑪：郡家町教育委員会1990『下坂1号墓』。

出典

第1図・第3～8図：邑南町教育委員会収蔵調査時作成記録図面をもとに作成 第2図：邑南町教育委員会提供 第9・12・13図：報告者作成 第10図：仁木編2007より報告者作成 第11図：佐々木編1986より報告者作成 写真1～3：邑南町教育委員会提供 写真図版1-a～3-d：邑南町教育委員会提供 写真図版3-e：報告者撮影

第1表 輪之内墳丘墓墓壇一覽

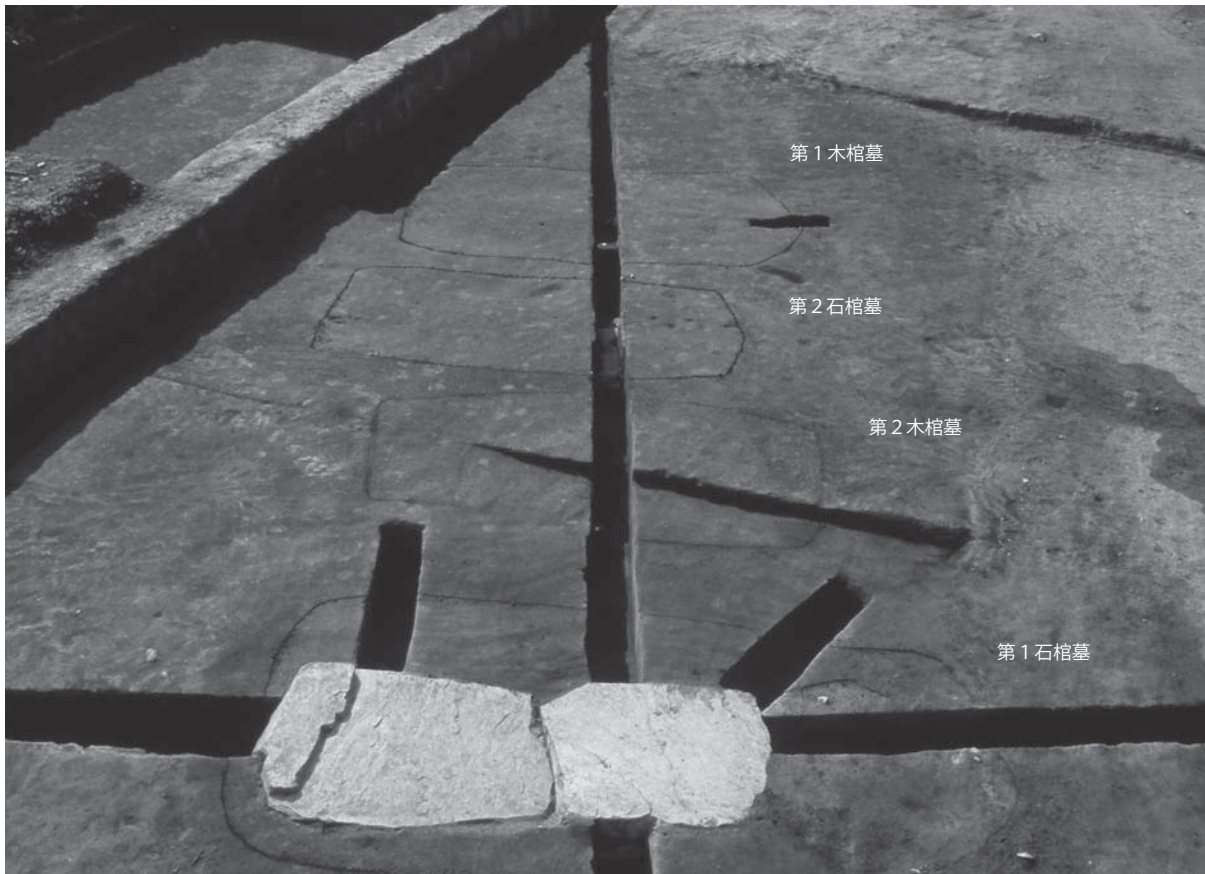
遺構名	種類	墓壇規模 (m)			埋葬施設規模 (m)			出土遺物	備考
		長軸	最大幅	深さ	長軸	最大幅	深さ		
第1石棺墓	箱式石棺	検出2.96 床面2.72	検出1.46 床面1.28	0.42	2.10	0.60	0.35		
第2石棺墓	箱式石棺	検出2.52 床面2.40	検出1.18 床面1.04	0.58	2.02	0.60	0.36	土器 (9・6・7)	
第1木棺墓	木棺	検出3.14 床面1.60	検出1.32 床面0.75	0.50	2.30	0.60	—	土器 (9-1～5)	二段掘り状
第2木棺墓	木棺	検出1.80 床面1.74	検出1.22 床面1.08	0.3	1.36	0.64	—		赤色顔料
第3木棺墓	(木棺)	—	—	—	—	—	—		詳細不明
第4木棺墓	(木棺)	—	—	—	—	—	—		詳細不明

第2表 輪之内墳丘墓出土土器観察表

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	時期	法量(cm) 0内復元	胎土	色調	文様・調整その他	備考
9-1	3-e	第1木棺墓 2層	弥生土器	甕	後期前葉 ～中葉		1mm程度の砂粒 多量に含む	外：灰黄褐色10YR5/2 内：灰黄褐色10YR4/2～ 黒褐色10YR3/1	外：ナデ 内：ナデ、ケズリ	脚の可能性
9-2	3-e	第1木棺墓 2層	弥生土器	甕	後期前葉 ～中葉		0.5mm以下の砂粒 多量に含む	外：暗灰黄色2.5Y5/2～ にふい黄褐色10YR6/4 内：暗灰黄色2.5Y5/2	外：擬凹線文4条、 ノ字形刺突文、ナデ 内：ナデ、ケズリ	外面煤付着
9-3	3-e	第1木棺墓 2層	弥生土器	甕	後期中葉		1mm程度の砂粒 少量含む	外：にふい黄褐色10YR7/4 内：浅黄褐色10YR8/4	外：ナデ 内：ナデ	外面煤付着
9-4	3-e	第1木棺墓 1層	弥生土器	甕	後期中葉		1mm以下の砂粒 極少量含む	外：灰褐色7.5YR5/2 内：灰褐色7.5YR4/2	外：擬凹線文5条、 ノ字形刺突文、ナデ 内：ナデ、ケズリ	外面煤付着
9-5	3-e	第1木棺墓 1層	弥生土器	高坏?	後期中葉 ～後葉		1mm程度の砂粒 多量に含む	外：にふい黄褐色10YR6/3 内：にふい黄褐色10YR6/4	外：ナデ 内：ナデ	
9-6	3-e	第2石棺墓	弥生土器	壺	後期中葉?	口径(21.0)	1mm以下の砂粒 極多量に含む	外：にふい黄褐色10YR7/3 内：黄灰色2.5Y5/1～ にふい黄褐色10YR7/3	外：擬凹線文6条後一部 ナデ消し、擬凹線文 14条以上、ナデ 内：ナデ、ミガキ?	頸部擬凹線文 は2条一単位
9-7	3-e	第2石棺墓	弥生土器	壺	後期後葉?		1mm以下の砂粒 多量に含む	外：にふい黄褐色10YR7/3 内：にふい黄褐色10YR6/3	外：擬凹線文4条、ナデ 内：ナデ、ケズリ	

第3表 分析対象資料一覽

遺跡名	所在	名称	墳丘形態	墳丘規模(m)	墓壇構築	埋葬配置	埋葬主軸	埋葬施設数	小児埋葬	時期	文献
波来浜遺跡	島根県江津市	B調査区3号墓	貼石墓	4.1×2.7	不明	不明	不明	不明	不明	V-2	①
順庵原遺跡	島根県邑智郡 邑南町	1号墓	四隅突出型	10.8×8.3	墳丘先行型	並列型Ⅰ	長軸直交	3基 少数埋葬	d類	V-2	②
輪之内遺跡	島根県邑智郡 邑南町	輪之内墳丘墓	貼石墓	16.2×12.5	墳丘先行型	並列型Ⅰ	長軸直交	6基 多数埋葬	d類	V-2	
三田谷Ⅰ遺跡	島根県出雲市	1号方形周溝墓	区画墓	10.6×9.7	不明	単独埋葬型	長軸平行	1基 単独埋葬	d類	V-2	③
日下墳丘墓	鳥取県米子市	弥生1号墳丘墓	四隅突出型	8×不明	墳丘先行型	圍繞型Ⅱ	長軸直交	4基 多数埋葬	d類	V-2	④
妻木晩田遺跡	鳥取県西伯郡 大山町	仙谷2号墓	四隅突出型	7.4×7.1	墳丘先行型	並列型Ⅰ	長軸直交	3基 少数埋葬	d類	V-2	⑤
阿弥大寺墳墓群	鳥取県倉吉市	1号墳丘墓	四隅突出型	13.6×不明	墳丘先行型	並列型Ⅱ	長軸直交	不明	不明	V-2	
		2号墳丘墓	四隅突出型	6.4×不明	不明	不明	不明	不明	不明	V-2	⑥
		3号墳丘墓	四隅突出型	6.2×不明	不明	不明	不明	不明	不明	V-2	
柴栗墳丘墓	鳥取県倉吉市	弥生墳墓	四隅突出型	不明	不明	不明	不明	不明	V-2	⑦	
重山墳墓群	鳥取県鳥取市	重山1号墓	貼石墓	16.9×12.5	墳丘先行型	圍繞型Ⅲ	長軸直交	3基 少数埋葬	d類	V-2	⑧
滝山猿懸平墳墓群	鳥取県鳥取市	1号墓	台状墓	6×不明	墳丘先行型	単独埋葬型	不明	1基 単独埋葬	d類	V-2	⑨
門上谷墳墓群	鳥取県鳥取市	1号墓	台状墓	21.8×15.5	不明	圍繞型Ⅲ	長軸平行	26基 多数埋葬	不明	V-2	⑩
下坂1号墓	鳥取県八頭郡 八頭町	下坂1号墓	台状墓	12×12	不明	圍繞型Ⅱ	正方形	7基 多数埋葬	不明	V-2	⑪



写真図版 1 - a 輪之内墳丘墓墓壙検出状況 (南東から)



写真図版 1 - b 輪之内墳丘墓墓壙完掘状況 (南東から)



写真図版 2- a 墓壇完掘状況（北西から）



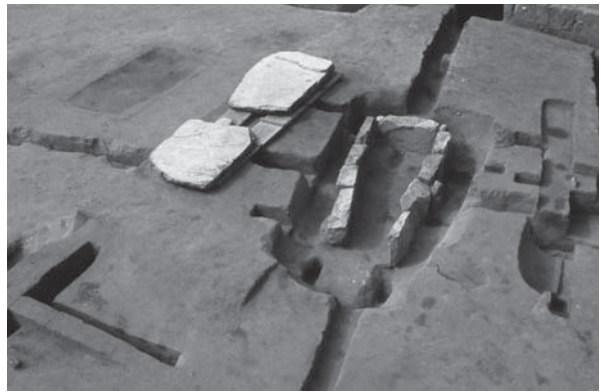
写真図版 2- b 貼石検出状況（南西から）



写真図版 2- c 貼石検出状況（北から）



写真図版 2- d 箱式石棺検出状況（北東から）



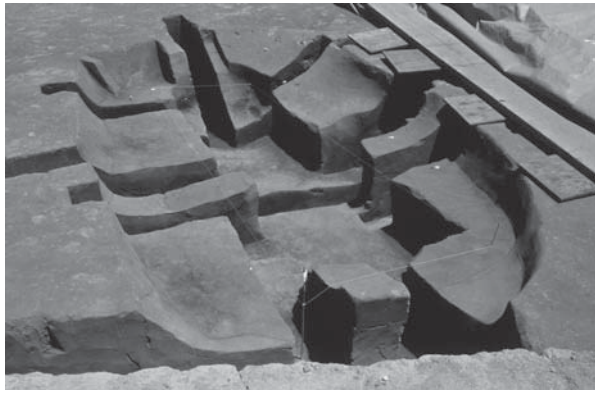
写真図版 2- e 第1石棺墓完掘状況（北から）



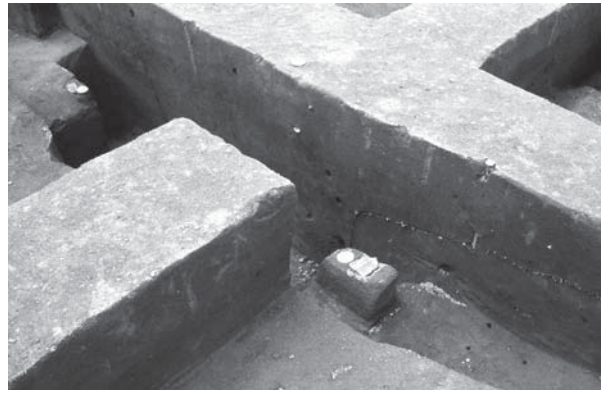
写真図版 2- f 第2石棺墓棺内堆積状況（南西から）



写真図版 2- g 第2石棺墓完掘状況（南西から）



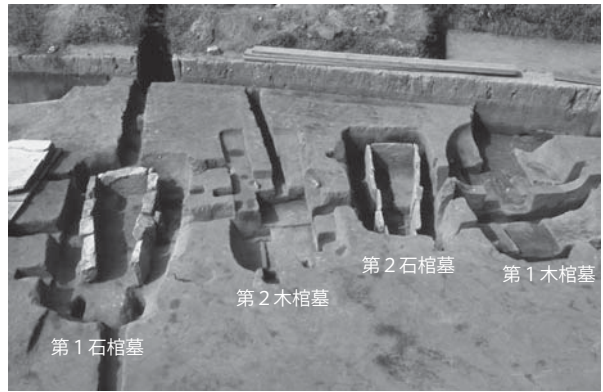
写真図版 3- a 第1木棺墓完掘状況 (南西から)



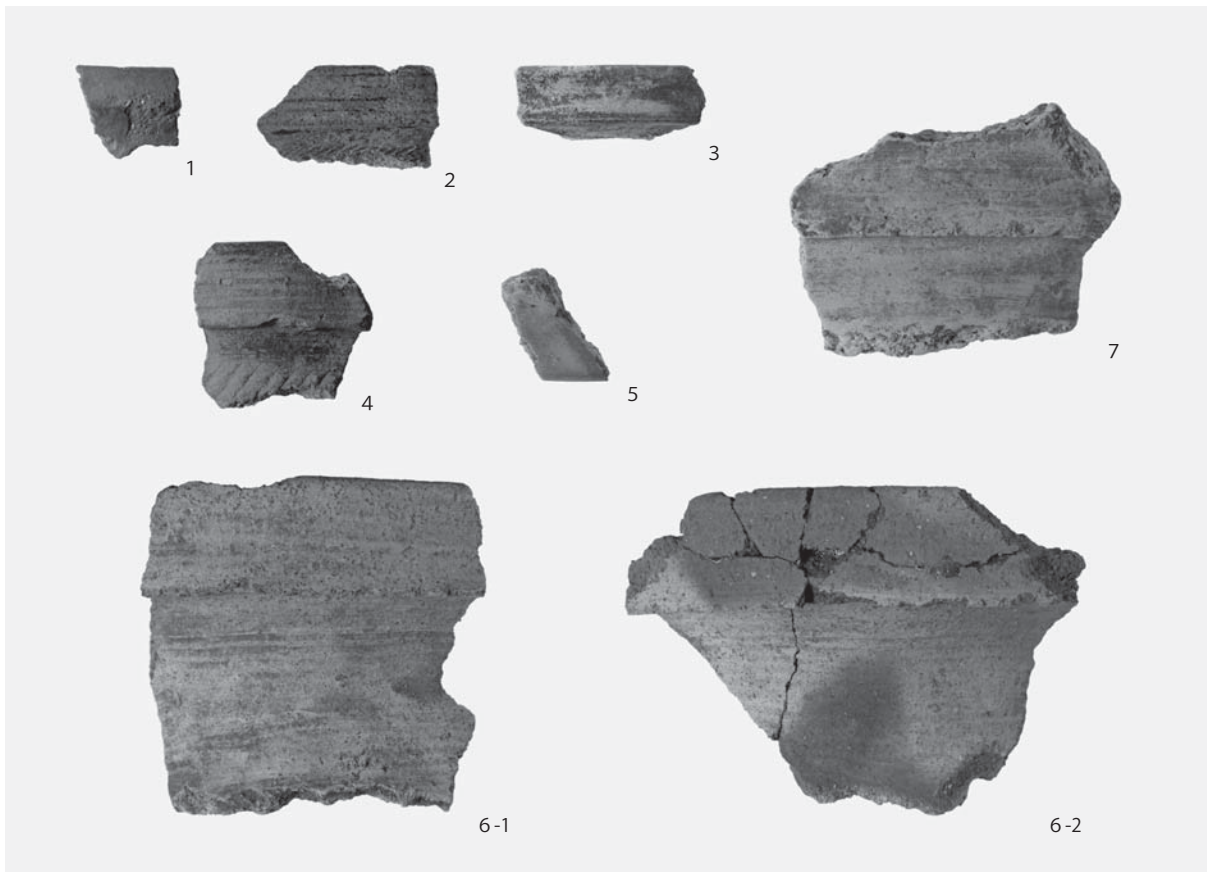
写真図版 3- b 第1木棺墓土層 (北から)



写真図版 3- c 第2木棺墓掘削状況 (北東から)



写真図版 3- d 墓壙完掘状況 (北東から)



写真図版 3- e 輪之内墳丘墓出土土器